

富山市の中世集落(2)

おぐらなかにて 一富山市婦中町小倉中稲遺跡一

おぐらなかにて
小倉中稲遺跡は、富山市南西部の婦中町小倉地内に所在する、古代・中世・近世の遺跡です。

井田川左岸の扇状地上に立地し、標高は30m前後です。

平成4年度から5年度にかけて、6,590㎡にわたり発掘調査を実施しました。その結果、12世紀中頃～16世紀前半の間に3つの時期の遺構・遺物が見つかり、断続的ですが、中世全般にわたって営まれた集落遺跡であることがわかりました。



遺跡周辺位置図

移り変わる中世の集落

見つかった遺構の時期は、①12世紀中頃～13世紀前半、②14世紀前半、③15世紀後半～16世紀前半の3時期に分かれます。

① 12世紀中頃から13世紀前半の遺構は、ほったてばしらたても掘立柱建物跡13棟、井戸、溝、土坑、ピットなどがあります。掘立柱建物跡には底がつくものが2棟あります。また、掘立柱建物跡には、方位が同じものが3グループあります。同じグループの建物は同時期に建っていた可能性があります。

遺物は、中世土師器、珠洲、輸入陶磁器、石製品、木製品などが出土しています。

②14世紀前半の遺構は、調査区の中央で掘立柱建物跡2棟、石組遺構、溝などが見つっていますが、数は少ないです。

石組遺構は石を二段に積んでいます。内側に石の面をそろえて石を組んでおり、石組み内

に施設を持つと考えられます。きょうづか経塚などの宗教施設の可能性もあります。

③15世紀後半から16世紀前半の遺構は調査区の南と北に離れており、掘立柱建物2棟、井戸、土坑、ピットなどが見つっています。

遺物は、中世土師器、珠洲、八尾、瀬戸美濃、がしつぶつかへい瓦質仏花瓶、ひさげとって銅製の提子把手、石製品、木製品などが出土しています。

時代	年代	世紀	小倉中稲の時期
鎌倉	1200	13	①
	1300		②
南・北朝		14	
室町	1400	15	③
	1500		
	1600		

年代のめやす

小倉中稲の集落は、12世紀中頃から13世紀前半には、多くの建物が建ち、ピークをむかえますが、14世紀前半には、川の流れが変化するなどにより集落が移動・あるいは縮小し、15世紀後半から16世紀前半には、遺構が分散して、建物が散らばっていたと考えられます。

集落の性格がうかがえる色とどりの陶磁器

小倉中稲遺跡では、中国から輸入された青磁・白磁、瀬戸美濃天目茶碗など、当時の一般集落では使われないような高級な陶磁器が多く出土しています。また、提子の銅製把手や瓦質の仏花瓶といった、仏教関係の結びつきがうかがえる遺物もあります。

このことから、遺跡付近一帯には、中世の寺院か、あるいは仏教に關係する施設があったのではないかと考えられます。

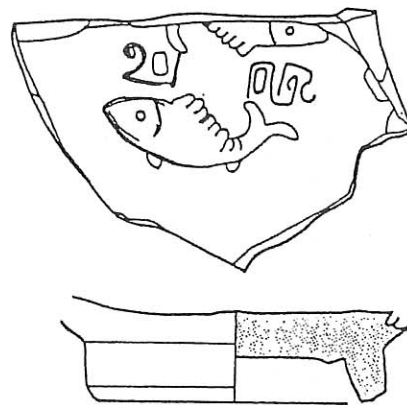
遺跡の西方1.8km千里地区の丘陵中腹には、^{じょうらくじ}常楽寺というお寺があります。寺伝では大宝2年(702年)、行基によって創建されたとする古いお寺で、大きな勢力を持ち、一時は富山市山田まで1千もの僧坊が並んだ、^{じゅういちめんかんのりつぞう}と^{しょうかんのりつぞう}言い伝えられています。

このお寺にある木造^{じゅういちめんかんのりつぞう}十一面観音立像と木造^{しょうかんのりつぞう}聖観音立像は、平安時代初期(1000年以上前)に造られ、常楽寺の古さを物語る立派な仏像です。国の重要文化財に指定されています。

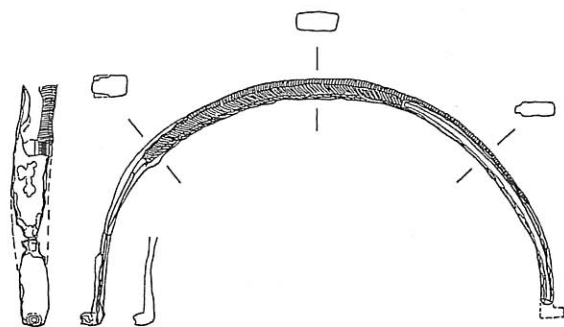
最近このお寺の裏山では、14世紀から16世紀の^{ごりんとう}五輪塔や^{ほうきょういんとう}宝篋印塔、^{いたび}板碑などの石造物が大量に見つり、中世には墓地として利用されていたことがわかりました。

このことから、常楽寺周辺一帯は、少なくとも中世には何らかの宗教施設として機能していたと考えられます。

小倉中稲遺跡でも、同じ時期の遺構が見つかっており、関係があると考えられます。
(作成：細辻)



魚の意匠のある青磁椀



銅製の提子把手

【引用・参考文献】

- 婦中町教育委員会 1992 『小倉中稲遺跡調査報告書』
- 婦中町教育委員会 1993 『小倉中稲遺跡調査報告書(2)』
- 婦中町教育委員会 1996 『婦中町史』
- 西井龍儀 2007 「常楽寺周辺の遺構と石造物調査」『富山市の遺跡物語』富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報 vol.8 など